

〔書言字考節用集二時候〕晚闇ヲラレ萬 暝黑同

〔倭訓栞由中編二十七〕ゆふまぐれ 夕間暮なり、夕暮に同じ、

〔源氏物語少女十一〕御めのといと心ぐるしうみて、宮にとかくきこえたばかりて、夕間暮の人のまよひに、對面せさせ給へり、

〔書言字考節用集二時候〕黃昏タツレドキ 刻 誰彼同時俗字

〔日本釋名上時節〕昏黑タツレ 誰彼タツレ也、日くれてたれかれとうたがひて、分明ならざる也、晚○曉○誤恐を萬葉に彼誰時カクシとよめるが如し、

〔空穂物語 菊宴〕すのこちかくよりて、宰相

夕暮のたそがれどきはなかりけりかくたちよれどとふ人もなし、とてのほりてゐ給ぬ、

〔拾遺和歌集十六〕題春えらす

大中臣輔親

あし曳の山郭公里なれてたそがれ時になのりすらしも

〔源氏物語初音二十三〕花の香さそふ夕風のどかに打咲たるに、おまへの梅やうくひもときて、あれは誰○どきなるに、物のえらべどもおもしろく、略○下

〔書言字考節用集二時候〕晡時フタタタ又云 晚刻同

〔源氏物語若栞三十四〕夕かたかのたいに侍る人の、えげいさに對面せんとて、いでたつついでに、略○下

〔源氏物語二十五〕ほたるをうすきかたに、此夕つかたいとおほくつゝ、みをきて、略○下

〔新撰字鏡日晡由千反平、申時、由、不、佐、利、

〔倭訓栞由中編二十七〕ゆふさり 新撰字鏡に晡をよめり、夕かたを云、夕にしありと云義、えあ反さ

也、よてゆふさりつかたともいへり、

〔古事記中神武〕御祖伊須氣余理比賣患苦而、以歌令知其御子等、略○中 歌曰、宇泥備夜麻、比流波久毛登